



学校だより 青い鳥

平成30年度10月号
さいたま市立上落合小学校
平成30年10月1日作成

さいたま市中央区上落合4-14-24 TEL 852-5381
http://kamiochiai-e.saitama-city.ed.jp/ E-mail:kamiochiai-e@saitama-city.ed.jp



ヤーゴの信条

校長 藤澤 太郎

暑くてたいへんだった夏が少しずつ薄れて、晴れた日は爽やかな風が心地よく、勉強にも運動にも適した季節となりました。喉もと過ぎれば～と言いますが、あの蒸し暑かった夏のことはすっかり忘れて、秋を楽しもうとする気持ちがみなぎってくるから不思議なものです。行事がほど良い間隔で予定されています。子どもたちは、勉強に遊びに頑張ると同時に、行事への準備も進めています。誰もが、「それが楽しみ！」と感じているところが素晴らしいですね。どの行事も盛り上がって、自分たちの取組の成果が出るといういなと願うばかりです。

今月は人の関係性について考えてみます。表題の「ヤーゴ」はシェイクスピアの悲劇「オテロ」の中の登場人物です。オテロはキプロスの総督でムーア人、その軍の旗手がヤーゴです。ヤーゴはカッシオ（副官）を躍らせてオテロをおとし入れるというストーリーで、そもそもオテロのことを妬み嫌っていたところがこの戯曲の根幹です。人のイヤな面や、対照的に美しい心が見事に描かれていて、たいへん素晴らしいと思うところです。オテロは演劇でも表現されますが、オペラでも上演される作品です。中でもヴェルディの作曲によるものは秀明で、400年前のイギリス（文学）からは想像できない進化をしたのではと思っています。ヤーゴの性質とかオテロ（ムーア人）は気高いといった設定がとても明確で、シェイクスピアは400年前にこの戯曲を完成させましたので、当時の人間の気質というより、当時から続く人間社会の社会性のもととなる人間本来？の関係性についてなるほどと思わせることが特に描写されています。

それは、人と集団で何かをしようとする時に、はじめに他の考えを尊重するのかどうかということにかかってくるということです。劇中では、（オテロに何かされたわけではないのに単に嫌いというだけで）自分の仕掛けた罠で、オテロが壊れていく様を見たヤーゴも、相当に苦しかったと思わせるシーンがありますし、ヤーゴの悪だくみを見抜けなかったオテロにも責任がある。ウラの取り方はいくらでもあったろうにと思ってしまう自分（私）にも気付きます。このあたりは、脚本や演出・演者の技量が試される場所でもあります。また、オペラが商業ベースであり、興行としての性格をもっていたこともあり、大衆娯楽としての性質も現れています。

次に気付くのは、脚本全体が当時の社会観を反映していることです。原典がギリシャ時代で、それをシェイクスピアが400年前に起こし、さらにその200年後にボイトが脚本を書いていますので、当時のヨーロッパやイタリアの風潮がよく表れています。原典の頃であればヤーゴは当然のことをしたままで、（あまり多くは語れません、）オテロがデズデーモナという女性の方に行ってしまったために起ったことで、必然的にヤーゴは悪者になったわけです。

肝心のヤーゴの信条ですが、ヤーゴもまた人間であったというのがこの物語の示すところで、人の関係性とは愛情でも憎しみでもあり、時として社会に影響されるものということでしょう。つまり、ヤーゴは誰の中にも存在するし、また、だれでもオテロにもなりうるということであると思いました。学校では、心の持ち方や社会性や道徳心などを、生活時間の中で一体的に育むようになっていきます。そして例えば道徳の授業では、様々な人間性について考えを進める過程で、人の気持ちが分かるということが最も大切な内容です。「オテロ」を教訓と考えるか文学と考えるかは自由ですが、人を尊重する気持ちを持つことが今も昔も大切なことなんだと自分にいいかせました。リコルディ出版社や歌手（ゴッピ）の話を展開したかったのですが、また別の機会に。

いい季節に、充実した活動ができますよう願っています。

学校教育目標

あかるく なかよく たくましく